

伊勢の今を伝える

ISEBITO NEWS

秋の号

第13号

いせびとニュース

●発行 伊勢文化舎 伊勢市観光協会
おかげ参り推進委員会
●発行部数 10万部
●企画・編集 伊勢文化舎
〒516-0016 三重県伊勢市神田久志本町1474-3
TEL (0596) 23・5166 FAX (0596) 23・5241
E-mail otayori@isebito.com

13

遷御の儀

内宮 十月二日(水)

外宮 十月五日(土)

明日は大祭 浄めの風が吹く

夕暮れの祓所に
すべての御料が端然と列をなし、
奉仕者総員、低く頭を垂れる。
明日は「遷御の儀」



川原大祓(外宮)。遷御の前日の夕、奉仕する神職たち百余名、御料を納めた辛櫃三十四合など、すべてが神域の祓所に勢をいして払い浄めが行われる。内宮10月1日、外宮10月4日 (平成5年撮影)

大祭へ準備万端

朝夕、ようやくの爽気に心身がよみがえる。

この夏はこのほかの酷暑であったが、伊勢ではお白石持行事が無事、盛大に終えることができた。式年遷宮の年に、川曳と陸曳で内宮へ、陸曳で外宮へ、御敷地に敷き詰めるお白石を奉獻する二十年に一度の大行事である。

今回は、地元神領民十五万七千人に加え、全国各地から特別神領民七万三千人、といずれも二十年前を上回る参加があった。流した大汗は、心に浸みる思い出となり、次世代へしっかりと町の伝統を伝えることができた、と神領民は自負する。今、新しい御敷地の正殿のまわりには白石が美しく敷き詰められている。

九月に入り、御戸祭、御船代奉納式、洗清、心御柱奉建、杵築祭、後鎮祭と遷宮への祭りが着々と進み、新しいご正宮の完成が祝われる。十月一日(内宮)、四日(外宮)の御装束神宝説合からは、いよいよ遷宮祭である。この祭りから祭主も奉仕され、全員が真新しい遷御奉仕装束に威儀を正して臨む。

同日夕、祓所で行われる川原大祓では、「遷御の儀」にかかわる物と人のすべてが祓い浄められる。翌十月二日に内宮、五日に外宮で「遷御の儀」が行われる。今世紀初の盛儀に、これまでにままして注目が集まる。

次号予告 大特集「遷御の儀」

●問い合わせ 神宮司庁
05966241111

●主な内容

- 2・3面 一正殿、完成!
- 4・5面 遷宮祭せるまる
- 6・11面 お白石持行事タイジエスト
- 12面 内宮・外宮奉献/特別神領民 いせびと歳時記 遷宮奉祝奉納行事



遷宮で結ぶ人の輪 心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

内宮正殿



皇大神宮(内宮)の新宮。

新しい御敷地に ご正殿、完成!

神領民総出のお白石持行事が終了した九月上旬、お白石を敷き詰めた新しい正殿が公開取材となった。内宮、外宮ともにその完璧な神明造は、周囲を照らすほどの輝きを放っている。

新宮は西の御敷地に

新宮はまさに照り輝いている。無垢のヒノキから放たれる芳香をまじえた柔和な輝きである。千木、鯉木、御扉、木階などには、金色の飾り金具が清々しい華やぎを添えている。勾欄の彩となるのは二十七個の居玉だ。

ご正殿の造営については、代々不変を鉄則としているが、今回は、これら飾り金具と居玉の数を削減し、文様を替えるなど、幾つかの変更があった。時代に影響を受けて飾り金具の数量が増え、文様も

やや華美になっていたのを平安後期から鎌倉時代の仕様とし、簡素を旨とする神明造にふさわしい状態にもどしたという。

神路山の山裾に鎮まる皇大神宮(内宮)の御敷地は、緩やかな傾斜地にある。今回、新宮の建っているのは西の御敷地だ。一段高い東の御敷地に見える正殿の屋根がいかに神さびて二十年の歳月を物語っていた。

なお、公開取材の直後から、「遷御の儀」の準備として二つの正宮を結ぶ雨儀廊の建設が内宮・外宮ともに着手された。



内玉垣御門と中重鳥居。



新宮より一段高く本殿が望まれる。



正面の握舎は明治以降の設計。



勾欄には居玉が輝く。



屋根の鯉木は内宮は10本、千木は内削。



木階には擬宝珠などの飾り金具。



伊勢名物

赤福

本店 〒516-0025 伊勢市宇治中之切町26番地
電話 0596-22-2154(代) ファクシマール 0120-081381
<http://www.akafuku.co.jp/>

外宮正殿



豊受大神宮(外宮)の新宮。

内宮と外宮の見分け方

新しい御敷地の内院に立つと、周囲の緑の美しさに感嘆する。それは、内宮にも外宮にも共通することだが、同じ神明造でも両宮には幾つか区別がある。

- 鯉木の数
内宮 十本
外宮 九本
- 千木の形
内宮 先端が水平に切られている。
(内削) 風穴二つ半
- 外宮 先端が垂直に切られている。
(外削) 風穴二つ
- 東、西宝殿の配置
内宮 正殿の後方
外宮 正殿の前方
- 外宮にのみ御饌殿がある。

そのほか、外宮より内宮の方が規模が大きく、床板張、桁や梁の組み方の手法などが異なっている。また、外宮の御敷地は、内宮のような山裾の傾斜地ではなく平坦な山田原にある。神明造の特徴である鯉木は、内宮所属の宮では偶数、外宮では奇数、とそれぞれの別宮、摂社、末社、所管社までも共通している。

「正宮の出来ばえは満点！」 ◆元神宮技師 荒井留五郎さん(談)

「今回は一字田奉献団の神領民としてお白石を奉獻し、内宮と外宮それぞれのご正殿をしっかりと拝見することができました。柱も壁も萱屋根も立派に仕上がっており、小工たちの仕事ぶりも、ヒノキの材質も申し分ない。満点です。よかった、と心から安堵しました。

歴史を調べると、社殿の造営も時代の影響を受けて変遷があります。ご正殿の丸太も戦国時代には細いものも使われている。大工道具にしても台鉋が開発される江戸中期より前では今のようになつやつやとした仕上がりの柱はのぞめなかったはず。

私が初めて神宮工作所で迎えた昭和二十八年のご遷宮造営では、太い棟持柱を立てるにもすべて人力。重機は存在しないという時代でした。戦後、四回のご造営を経て、適切な動力の導入もあり、現場はかなり変わってきています。

変わらないのは、大神さまのために最高のものを造り上げるといふ宮大工たちの心映えですね。一本の柱、一枚の板は、太く長く重い棟持柱にいたるまで、それぞれ一人の大工が担当し手鉋でつるになるまで精魂込め、責任をもって仕上げます。つねに神明造の原点に立ち返り、最善を尽くした結果がご正殿に凝縮されているといえましょう。

◆荒井留五郎(あらい・とめごう)氏プロフィール
大正14年生まれ。東京都小平市出身。昭和27年、第59回式年遷宮に宮大工として奉職。第60回、第61回式年遷宮に技師として奉仕。平成6年退職。



撮影：溝口照正
文：乾淳子

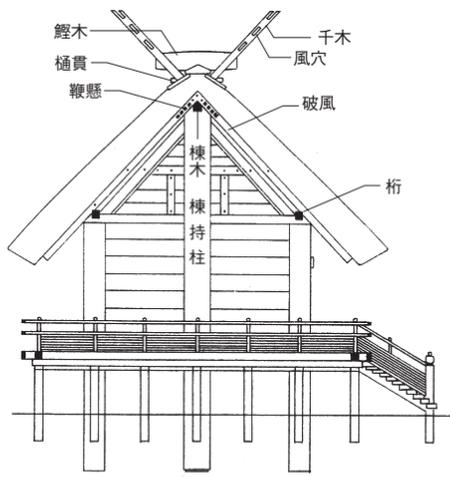
外宮のみにある御饌殿。

「せんぐう館」で見る

外宮正殿と宮大工の道具

内宮・外宮ともに、ご正殿は幾重もの垣に囲まれた正宮の中にある。参拝者には残念ながらご正殿を目にする機会はない。そこで、おすすめしたいのは、「せんぐう館」の外宮正殿の一部を原寸再現した展示である。神明造の特徴は、高床、萱葺、切妻の屋根。その屋根には千木がそびえ、鯉木が並ぶ。柱は丸柱で根元を地面に埋めた掘立式である。この模型は正殿と同じ素材を使い現役の宮大工が作り上げた精巧なものだ。宮大工の道具も、同じフロアーに展示されており、木組みの模型もあつて、興味深い。

式年遷宮記念せんぐう館
入館料 大人300円 小中学生100円
開館 9時～16時30分(最終入場16時)
休館日 毎月第4火曜日(祝日の場合はその翌日)
住所 伊勢市豊川町前野126-1(外宮宮域内)
☎0596・22・6263



神明造の主な特徴(内宮)



天に伸びる千木(外宮)。



祭場となる中重。右手に四丈殿。

奉祝

第62回 神宮式年遷宮

東京のお伊勢さま  東京大神宮



「遷御の儀」の前に

(※カッコ内は外宮日程)

御装束神宝読合

十月一日(四日)午前十時

御装束神宝を納めた辛櫃を新宮の御垣内に並べ置き、四丈殿において祭主がその目録(巻物)を点検する式が行われる。

これより、一同、遷御奉仕の服装となつて奉仕する。

川原大祓

十月一日(四日)午後四時

五十鈴川右岸。瀧祭神の南方を祓所として行われる(外宮では中御池のほとり、三ツ石辺りが祓所となる)。

奉仕する神職たち百余名、御料を納める辛櫃二十四合など、遷御にかかわるすべての物と人が勢ぞろいして、祓い清められる。御装束神宝を納めた辛櫃は、前回までは素木だったが、今回は、古来の朱と黒の漆塗りにもどされ、いっそう雅やかなたずまいとなる。

御飾

十月二日(五日) 正午

遷御が行われる日の正午、ご神体をお迎えできるように新宮の殿内を御装束などにより美しく調える。大宮司、少宮司、禰宜がこれを行い、祭主が検分する。

●午後一時より、一般参拝は停止となる。



川原大祓(外宮)

浄闇の中、 神代の祭り さながらに

秋十月。ご正宮が完成し、御装束神宝もすべて調い、いよいよ遷宮祭が行われる。神宮式年遷宮の成就するもつとも重要な宮遷りの神事である。神職たち奉仕者は、新調した遷御奉仕の装いに威儀をただし、厳かに祭りに臨む。



ご神体は絹垣と行障の内にすむ(外宮)。



祭主はじめ、参進する神職たち。



松明の明かりで参進する。

遷宮祭

(せんぐうさい)

内宮 十月一日〜三日
外宮 十月四日〜六日

※遷宮祭は一般の参拝者の拝観はできません。
※遷宮祭・奉祝行事の写真はすべて前回平成5年に撮影したものです。(フォトプレス伊勢志摩)

遷御の儀

十月二日(五日)午後八時

この祭りを迎えるにあたり、百名を超える奉仕者たちは神域にある斎館において参籠齋齋を行う。役目によって、二夜〜五夜籠つてこの時にそなえる。

出御の刻限になると、明かりは消され、浄らかな暗闇とされる浄闇の中で古代と変わらない式次第によって遷御の儀が行われる。

午後六時前、静まり返った神域に参進を告げる報鼓が白丁により打ち鳴らされる。

斎館より正宮へ、勅使一行につき、祭主、大宮司、少宮司、神職たちの参進が始まる。

玉串行事所で一行は太玉串を両手にとり、さらに参進し内玉垣御門下にそれを奉納する。その後、内院へ進む。

勅使が正殿に向かい「新宮にお遷りを請奉る」と奏上。大宮司、少宮司が正殿の扉を開く。

読みあげられる召立文に従って御装束や神宝を神職たちが捧げ持ち、並ぶ。

天の岩戸の故事にならい鶏鳴所役が「カケコー」と三声唱える(外宮は「カケロー」)。

八時ちようど、勅使が階下にすすみ「出御」と三度唱えるのを合図に、白い絹垣に囲まれ神職たちに護られたご神体はお出ましになる。

〈時を同じくして、皇居の神嘉殿の前庭では天皇陛下が庭上下御という最も丁寧な作法で神宮を遙拝される。〉

御列は、楽師たちの奏する雅やかな道楽の流れる中をゆるやかな足取りで新宮へ遷りゆく。
ご神体、新宮に入御する。

頭の深(神)呼吸に
来ませんか

奉祝 第62回神宮式年遷宮



商売繁盛
職務安全・出世開運
仕事は独創性とひらめきが大切。疲れた頭と心を癒します。

学力向上
合格祈願
(大学・就職・資格・国家)
現代社会は頭の時代。受験・IT社会の守護神。

心の病気
頭の病気・ケガ
頭の神様の大きな御神助を戴いて病気回復。

頭之守護神 知恵の大神

頭之宮四方神社

三重県度会郡大紀町大内山

0598-72-2316

http://www.koubenomiya.or.jp/

●「松阪」よりJR線又は三重交通(南紀特急)「大内山駅」下車徒歩10分
●紀勢自動車道 紀勢大内山ICより尾鷲方面へ車で5分
●「松阪」伊勢からレンタカーが便利です。いづれも、およそ50分。

祝 第62回神宮式年遷宮

食の神さま外宮さまの見守る前で
日々精進を重ねて参ります。



一階 店舗 午前九時〜午後七時
二階 茶房「あそらの茶屋」 軽和食・喫茶「御願の朝かゆ」(朝のみ)
ギャラリ―
午前七時半〜午後五時 年中無休



- ◆本社 伊勢市上地町2691-13
電話0596・23・1281(代)
0120-00-0707
- ◆本店(外宮前) 伊勢市本町13-7
電話0596・23・3141(代)
- ◆参宮楽膳 伊勢市上地町2691-51
伊勢問屋センター前
電話0596・20・3958(代)
- ◆内宮前店 伊勢市宇治中之切町87
電話0596・28・0081

E-mail info@sekiya.com
http://www.sekiya.com

「遷御の儀」の後に

遷御の翌日(内宮三日、外宮六日)は、早朝から夜更けまで、新宮において五つの祭り・行事が行われる。

午前六時 大御饗

祭主、大宮司、少宮司、神職が参列し、瑞垣御門の前に御饗を供え、大宮司が祝詞を奏上する。

午前十時 奉幣

新宮の大御前に勅使が、幣帛を奉納。その後、五丈殿で饗膳を囲む。

午後二時 古物渡

旧殿に残されていた神宝類を西宝殿に移送する。

午後五時 御神楽御饗

「御神楽」を奉納することを大神に奉告する祭りをを行う。

午後七時 御神楽

宮内庁楽員により、秘曲が夕刻より深夜まで四丈殿で奏される。

●十月八日より、内宮(神苑特設舞台・参集殿ほか)・外宮(勾玉池奉納舞台ほか)では第62回神宮式年遷宮奉祝行事を開催。日本各地の芸能はじめ各種奉納が行われる。詳細は12面を参照。



江戸芸かつばれ(内宮・特設舞台)。



第61回遷宮記念神楽「栄久舞」。

「古事記や日本書紀によって伝えられる神話の核心部分は、天孫降臨、つまり天照大神が邇邇芸命を神々の世界である高天原から地上へ降ろす物語です。邇邇芸命は宝鏡などを携え大勢の神々を従えて列をなして天下るわけですが、この天上から地上へ向かう垂直の御列を水平の御列に移したものが遷御の御列と考えられます。また、倭姫命が大神のご鎮座の地を求めて宝鏡(ご神体)を奉じて伊勢へ巡行された旅も同様です。すなわち、祭りは語り伝えられてきた神話を繰り返す行為、といえるでしょう。神話を再現することによって、人は時空を超えて原初に立ち返り、神々や先祖たちの業や心を共有することができるのです」。

「遷御の儀」は、語り継がれてきた神話の再現といえます

◆神宮権禰宜 吉川竜実さん(談)

◆吉川竜実(よしかわ・たつみ)氏プロフィール
昭和39年生まれ。大阪府出身。皇學館大学国史学科卒業、同大学院博士前期課程修了。平成元年神宮司庁奉職。神宮権禰宜、神宮司庁広報室広報課課長。



特別奉拝席(招待者)。



社を照らす月影(平成5年10月2日)。



太玉串を手に参進する勅使。



五丈殿で饗膳(遷御の翌日)。



裾取りを従え、太玉串を手にもって参進する禰宜。

渡御の様子わかる「せんぐう館」の「遷御の儀」御列

ご神体を新宮へお遷しする御列は、およそ百五十人からなる。ほぼ中央に白い絹垣の囲むご神体です。その前後を御太刀や御弓など神宝の武具、蓋や翳など道中威儀具を奉じた奉仕員たち、道楽を奏でる楽長・楽師たちがゆっくと進む。



菅御騎
【すげのおんさしは】

羅紫綾御騎
【らむらさきのおんさしは】

赤紫綾御蓋
【あむらさきのあやのおんめがき】

楽長・楽師
【がくちよう・がくし】

道敷
【みちしき】

勅使
【ちよくし】

行障
【こうじょう】

赤紫綾御蓋
【あむらさきのあやのおんめがき】

祭主
【さいしゅ】
※赤紫綾御蓋の後方

絹垣
【きんがけい】

須賀利御太刀
【すがりのおんたち】

玉纏御太刀
【たままきのおんたち】

金銅造御太刀
【こんどうづくりのおんたち】

伊勢熨斗

伊勢志摩産のあわびを使った本物の熨斗袋

先様の健康と長寿を祝う心を形にした伊勢熨斗。結納長熨斗・のし袋・祝儀袋を取りそろえています。

祝 第62回神宮式年遷宮

海女の話聞きながら、海女小屋で新鮮な魚介に舌づつみ

海女小屋はちまんかまど

漁場に近い海女小屋で、海の幸の採り手である海女達の話聞き、手焼きによる魚介をいただきます。(100名様取寄)

みえの地域周遊定期バス
「ちよび旅」プラン

県内各地から出発するお手軽なバスの旅です。コースは、桑名歴史探訪・四日市ぐるバス・伊賀鉄道とまち歩き・津観音と歴史探訪・まごの店と松阪まち歩き・美し国周遊バス・世界遺産熊野古道と花の窟など多彩。所要時間は約3～4時間。旅行代金もお手頃、ひとり1000円から。

みえ旅パスポート

三重県観光キャンペーン(平成28年3月まで)期間中、みえ旅案内所でみえ旅パスポートを発給します。三重の旅がもっと楽しく、もっとお得になるパスポートです。

- 1 「みえ旅おもてなし施設」で使えるクーポン特典
- 2 県内各地を楽しく巡るスタンプラリー
- 3 ステージアップすることにより、プレゼントがグレードアップ!!

(株)観光販売システムズ ☎052(589)0200 旅をさらに充実させるなら ビジット三重県 検索

第六十二回神宮式年遷宮

お白石持行事 ダイジェスト

伊勢の町衆に

全国からの特別神領民が加わり、延べ二十三人が奉仕したお白石持行事。連日の猛暑にも負けず、お白石を載せた川ソリと奉曳車を心ひとつに曳いた。

七月末から九月頭まで

二十二日をかけて行われたお白石持の、後世に伝えたい感動の名場面の数々、紙上でお楽しみください。



水をかけ合って練る(楠部町奉献団)。



伊勢のお白石持終わる

撮影=阪本博文・鈴木和宏・高田健司・西井正樹・溝口照正 取材・文=編集部



エンヤ曳で外宮神域へ勢よく駆け込む(河崎六ヶ町奉献団)。

千年に一度ともささやかれた暑い夏、伊勢のまちは週末ごとにお白石持行事に沸いた。式年遷宮に際し、新宮の庭にお白石を奉獻するこの行事は、国の選択無形民俗文化財にも指定されている。内宮へは川曳と陸曳で、外宮へは陸曳で、市内の七十七奉献団が衣装、木遣りなど、各町の伝統スタイルを守り「エンヤ！」の掛け声で奉曳する。ソリや奉曳車に積んだ四斗樽には、宮川の河原で拾い集めた清らかなお白石。神域に曳き入れた後一人ひとりの手に渡され、まだヒノキの香漂う新宮へと向かう。五重の垣の最奥、神明造のご正殿を間近に仰げるのは、二十年に一度、この時限りである。四十年前の遷宮からは各県神社庁を通して参加者募集も行われ、今回も全国から約七万人の「特別神領民」が訪れた。また、研究者アーティスト、芸能人など数多くの著名人らがプライベートで参加し、市民に交じって曳き綱に連なった姿も印象深い。



内宮奉獻

幕開けは七月二十六日の川曳。内宮領奉獻団十八団が榊や鳥居など各々装飾を施したソリに白石の樽を積み、清流・五十鈴川を遡って内宮をめざした。

浦田橋詰を出発し、宇治橋前で神域へと引き揚げるまで約一キロの途次では、橋や堤防から多くの観衆が見守る中、団ごとの特色ある情景が繰り広げられた。

トップバッターの宇治奉獻団は約四千五百人の大所帯。三台のソリが連なり肅々と進む様子はさながら歴史絵巻の趣だが、お楽しみみの「練り」が始まると、水しぶきを上げて駆け寄る曳き子たちの歓声がワッと弾ける。



4500人が参加した宇治奉獻団。



江清渚連「江若」の木遣り衆。



朝熊町奉獻団がお白石持に合わせて創作した「朝熊小菜音頭」。



桜が丘奉獻団は、綱先をつないで輪になって奉曳。

川曳 ● 7 / 26・27
陸曳 ● 7 / 28 ~ 8 / 12

帯に響き渡る木遣り唄だ。中でも貫禄を感じさせた江清渚連、青年団「江若」の木遣り衆は「毎年三回行方夫婦岩注連縄張でも唄うので、普段から声を鍛えてきた」と言う。また中村町奉獻団では町に伝わる雄雌つがいのホラ貝が吹かれ、少人数の奉曳を力づけた。

こうして伝統が受け継がれる一方で、新しい風も起きた。地元の名産をテーマにした創作音頭の披露(朝熊町奉獻団)、和を大切にする心から繋いだ二本の綱先(桜が丘奉獻団)……。お木曳行事から参加の光の街奉獻団は、平均年齢三十歳という若さを前面に、宇治橋下から疾風のように走り込むエンヤ曳を見事成功させ、観衆をわかせた。



外宮さんと内宮さん二つのお宮が永久に光輝く地で商いをさせていただく縁より「二光堂」と名づけました。

祝 第62回神宮式年遷宮



http://www.nikodo.co.jp/

参宮客をもてなす
名物ステーキ牛丼をどうぞ



伊勢内宮前
ニえぎ
T 5100024
三重県伊勢市内宮おはらい町
TEL 0596224175
FAX 0596242510

おかげ座

神話の館

伊勢内宮前 おかげ横丁に 誕生

遠い昔、そのまた昔から語り継がれてきた、日本の神話。「おかげ座 神話の館」は、天照大御神が祀られる伊勢の里の、これまでになかった、本格的な神話体験館です。



伊勢内宮前
おかげ横丁
TEL 0596(23)8838
〒516-8568 三重県伊勢市宇治中之切町152
http://www.okageyokocho.co.jp/



ゆっくりと川の中を進む。(左上・江清渚連、右上・桜が丘奉献団、下・一字田町奉献団)

二見浦茶屋清渚連は、夫婦岩を模した樽で奉曳(右上)。宇治橋をめざす山田原奉献団(右中)。慶光院ゆかりの磯町慶光院奉献団は、内宮にのみ奉献(右下)。

五十鈴川を遡る中村町奉献団。



奉曳

水しぶき上げて川遡る

五十鈴川の浦田橋下流から宇治橋までの約一キロを遡る。水深の浅いところでは綱を押し合ったり、水を掛け合ったりして遊ぶ一幕も。川の流れが強い浅瀬の堰は、全員が一丸となって乗り越えた。

全国から23万人がエンヤー!

松下奉献団は、松下社の注連縄を付けて奉曳(左上)。神城まで駆け込んだ二軒茶屋奉献団(右上)。揃いの衣装で曳いた五十鈴ヶ丘奉献団(左下)。木遣りを合図にエンヤ曳(溝口奉献団、右下)。



ソリを一気に曳き上げる、勇壮なエンヤ曳をみせた伊勢古市・久世戸奉献団。

エンヤ曳

宇治橋の下で木遣りが唄われ、「エンヤ」の掛け声とともに一気に駆け上がる。全員で肅々と曳き上げる団、若手を中心となり神苑まで一気に走り込む団など、団によってさまざまなエンヤ曳をみせた。

宇治橋上から観衆見守る

木遣り

川面に響く唄声

川曳の木遣りは、周囲に建物など反響するものが少ない河原で唄われるため、大きな音量が必要となる。采も水にぬれても大丈夫なようにヒノキ等の皮を薄く削ったものが使われている。



42人の子ども木遣りが活躍した光の街奉献団。



20年後を担う子ども木遣りが元気いっぱいの唄声を披露(鹿海町奉献団)。



采が川風になびき、木遣り唄が響く。左上・中之町奉献団、右上・三津奉献団、下・桜木町奉献団

http://www.iwatoya.co.jp

金時生姜を使った
岩戸屋の生姜糖
鮮やかな赤色をした金時生姜は、
香りと辛味が大変強い分、美肌効果や花粉症を抑える効果があるといわれています。



祝 第62回神宮式年遷宮
お多福とともに
岩戸屋は今も昔も内宮前



伊勢・内宮前おほらい町
岩戸屋
TEL 0596-23-3188 FAX 28-1322

PEARL BOUTIQUE
珠魔
TEL 0596-23-6750

伊勢の上流をキャッチ
のちのちのち
百福者
TEL 0596-23-3236

奉祝 第62回神宮式年遷宮



伊勢おほらい町
豆腐庵山中
伊勢市宇治中之切町95番地
電話 0596・23・5558 定休日/木曜

美しい五十鈴川の水を生かした
豆腐を作りたい



「和妙」にぎたえ
水の良さを最大限
ひきだせるよう
作りあげた豆腐です。



おとろふソフト
「和妙」を50%以上含んだとろろふの
ソフトクリームです。



うの花どーなつ
90円



あんどーなつ 130円

うの花どーなつ
豆乳とおからを
練り込んだ
ヘルシードーナツです。

外宮奉献

8 / 17 / 9 / 1



倭町奉献団の木遣り衆は、日本武尊をモチーフに真白の装束で奉曳。



今回が初奉献の北浜連合奉献団。



最終日のトリを飾った岩淵町白石奉献団。

外宮領奉献団による外宮奉献は、八月二十三日より始まった。山田上口駅近くの浦口を出発点に、約一・四キロを各町自慢の奉曳車に白石を載せて外宮を目指した。

曳車に三百斤を超える綱を伸ばしての行列。大湊は、自慢の太い綱で大通りを自在に練り、漁師町らしい勢いある奉曳をみせた。樽の数なら高向奉献団の奉曳車には白石樽と飾りの化粧樽、合計六十個を搭載。二十〜三十個を積み団が多い中で群を抜き、約二千人が誇らしげに綱を曳いた。

道中の余興にも各町の特徴が。吹上町お白石奉献団は、休憩時に子どもや女性らが地域に伝わる「吹上甚句」を披露。江戸時代の奉曳のクライマックスは外宮北御門前から神城へ駆け込むエンヤ門の数十分手前から全速力で走りだし、ギャラリを沸かせた。

奉曳車

歴史、飾り、そしてワン鳴り

奉曳車にも各町の特徴が出ている。製作年、大きさ、ワン鳴り、伝統の装飾などさまざま。また、最大六十樽を積んで奉曳した団もあれば、古い味噌樽を使って、大樽一個で奉曳した団も。



左・田尻町奉献団、右・上長屋奉献団



左・尾上町永昌社奉献団、右・京町親友会



船江神習組奉献団の奉曳車は、全長7メートル10センチ、車輪の直径1メートル57センチ、総重量5トンにおよび市内でも最大級だ。



前山町養命団では、木遣りのメロディをサックスで披露。

余興

伝統の音頭からよさこいまで

休憩中のお楽しみは女性部などによる余興だ。伝統の伊勢音頭、現代風によさこいソーランなど趣向をこらした余興を披露した。前山町養命団では、サックス奏者である三姉妹が演奏し、観衆を沸かせた。



左上・浦口町奉献団、右上・一志町奉献団、左下・小木町笛曲団、右下・吹上町お白石奉献団

記念出版

お伊勢さんと遷宮

～第62回神宮式年遷宮を追う～

8年間の取材の集大成!



伊勢神宮の式年遷宮は、新社殿の造営、御装束神宝の調製などにかかわる日本古来の技術とその精神を、千三百年という時を経て振り返り伝えてきた、誇るべき文化です。

本書では、八年前の山口祭に始まった三十三の祭り・行事を振り返るとともに、神宝を調製する当代一流の匠から、米、塩などの御料づくりに携わる地元民まで、お伊勢さんに仕えるさまざまな人々の営みを紹介しています。

A5変型判 / 144頁
定価1300円+税

編集・発行 (有)伊勢文化舎

〇お求めは 三重県下の主要書店、ホームページ、または直接当社まで。アマゾンでも注文できます。

▶▶▶ <http://www.isebito.com>

全国から23万人がエンヤー！ 伊勢のお白石持終わる

第六十二回神宮式年遷宮



出雲町誠義会奉献団

西口町瑞穂連奉献団



河崎南側奉献団



小俣町奉献団



二見町西奉献団



常磐第一奉献団



竹ヶ鼻町奉献団



河崎町旭通奉献団



巨大な奉曳車に30樽を積み、威風堂々としたたずまいで進む(大湊奉献団)。

奉曳

伊勢っ子たちになじみの深い外宮さん。外宮領の奉献団にとって、お木曳でも奉仕する外宮とその界限はホームグラウンドだ。重厚なワン鳴りを響かせながら、各町自慢の奉曳車が大路をゆく。

町の特色がよく見える

練り

二本の綱を合わせて蛇行

二本の綱を合わせ、道幅いっぱい蛇行する「練り」。木遣りに合わせて曳き子たちが上下に綱を揺さぶった後で一気に中央に駆け寄り押し合う。木遣り子を綱ではさんで持ち上げるパワフル団もあった。



力いっぱい練る宮町お白石奉献団。



下野町奉献団



徳川山お白石奉献団



曾祢町奉献団



神久社奉献団



常磐表町奉献団



八日市場町篤友会



宮崎奉献団



栗友会社久留奉献団

次世代に「神領民」の心と技を伝える一冊 伊勢のお白石持

第62回神宮式年遷宮記念出版 第2弾!

全77奉献団の奉曳記録に加えて、一般には公開されない「遷御」グラビアを含む、8年間の遷宮ダイジェストを掲載。

B5判 約200頁
定価 1400円+税

新刊予告
11月発行予定



編集・発行 伊勢文化舎

予約受付中!

2014年「伊勢講ごよみ」 ＜11月中旬発行＞

テーマは『第62回神宮式年遷宮』

「伊勢講ごよみ」は神宮と神領の一年がわかるカレンダーです。8年をかけて行われる神宮のご遷宮をテーマに、写真に添える和歌・俳句などとともに、ご遷宮の厳かに美しい祭の風景や、ご遷宮成ったばかりの輝く新御正殿の雰囲気をお楽しみください。

1部 1000円(送料込み)・2部 1500円(送料込み)

お問い合わせ 伊勢文化舎 ☎0596-23-5166



伝統スタイルも凛々しく

木遣り

網の間で進行をリードする道中木遣り、各団伝統の衣装を身にまとった本木遣りが自慢の声を響かせた。各町の歌詞には町の歴史などが唄われ、采を振る立ち姿からは自分の町への誇りが感じられた。



左上・馬瀬町奉献団、左下・中島豊流団、右上・宮川町奉献団、右中・宮沼連合奉献団、右下・一色町白石奉献団

黒瀬町橋栄社お白石奉献団の本木遣り(左上)。進行をリードする木遣り衆(本町白石奉献団、左下)。女性木遣りも活躍(通町奉献団、右)。

杜の緑に奉曳車が映える

神域

神域へ入ってからは、多くの団が木遣りやマイクでの進行を控え、肅々と表参道まで曳いた。火除橋の手前に奉曳車が着くと、万歳三唱が起こり、神宮神職によるお祓いの後、新宮へと向かった。

今一色奉献団



大世古町奉献団



表参道の正面に、本木遣りを乗せた小川町勢勇団の奉曳車が到着。



高向奉献団



二俣町白石奉献団



常磐西世古奉献団

北御門へ一気に「エンヤ！」

エンヤ 曳

外宮北御門交差点かその手前で奉曳車の態勢を整えて、神域へと駆け込んだ。団によって、車上の本木遣りの勇壮な唄で出発したり、網を合わせる「一本曳」を披露するなどさまざまな終幕があった。



豪速のエンヤ曳をみせた一之木町須原奉献団。



左上から神社港辰組奉献団、岡本町お白石奉献団、下長屋奉曳団、新開梅栄団、右上から王中島奉献団、豊栄会、二見町荘奉献団

常磐仲町奉献団の「一本曳」。

全国から23万人がエンヤー！ 伊勢のお白石持終わる

第六十二回神宮式年遷宮



常磐西世古奉献団の「西世古太鼓」。





川端町天漁人奉献団の帰り車が度会橋をゆく。



大行燈を載せた京町親友会の帰り車。

のぼり車 帰せ車

飾り提灯の趣向もさまざま

各団の奉曳車が前夜または一週間前に自町からお白石持の出発点まで向かう「上せ車」と、奉曳を終えた車が自町まで帰る「帰り車」。いずれも夜に行われることが多いので、提灯や行燈などを付けての賑やかな曳行は、古くからの伝統でもある。

七月二十一日の夕刻、内宮奉献の出発点・古市をめざしたのは河崎六ヶ町奉献団。百個の提灯をつけ、若手の団員が中心になって上り坂を曳いた。宮川の対岸にある川端町は、国道四二号が通る度会橋を一時通行止めにして、外宮奉献の出発点・浦口へ。一方、帰り車は、巨大な丸行燈を積んだり(京町)、震災復興を願う東北の酒蔵メーカーの酒樽を積んだり(二俣町)と、趣向もさまざまに奉献後の余韻にひたった。



東北復興を願った二俣町白石奉献団の帰り車。



河崎六ヶ町奉献団の上せ車。



本町白石奉献団の上せ車。



創作ねぶた「風神と雷神」を載せた宮後お白石奉献団の上せ車。



参加者の声

■実際に奉曳車を見て歴史を感じ、地元のボランティアのみなさんの温かい声かけに感動しました。

菊地晴紀さん(伊勢市、20)

■綱の重さに歴史の重さを全身で感じました。ボランティアの方のチームワークが素晴らしいかったです。

椎名巳津男さん

(千葉県柏市、72)

■家族で参加しました。二十年後の白石持では、今、中学二年生の息子の子どもも一緒に家族みんなで訪れたいです。

上小倉一志さん

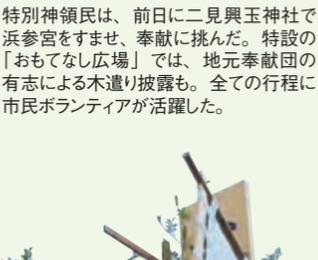
(名古屋市、52)

■二十年前は二世代で参加しました。今回は、家族が増えて親子三代で来ることができて感慨深いです。運んだお白石が二十年間、置かれると思うと嬉しいです。

本橋宣彦さん(東京都、53)

■夏休みなので、孫と一緒に参加しました。伊勢の人の心づくしのおもてなしに感激しました。

鈴木閑さん(愛知県碧南市)



昭和四十八年の第六十回式年遷宮から始まった特別神領民の募集は、今回の遷宮で三回目を迎えた。七月二十七日から九月一日までの二十日間に北海道から沖縄まで全国から七万三千人が参加した。内宮奉献は、おほらい町通りを、内宮までの約八百メートル(一時間)の間、一方、外宮奉献では、宮町交差点を出発し、外宮までの約一キロ(二時間)のコースだった。奉曳

全国から七万三千人 よろこそ特別神領民

もう一つのお白石持



特別神領民は、前日に二見興玉神社で浜参宮をすませ、奉献に挑んだ。特設の「おもてなし広場」では、地元奉献団の有志による木遣り披露も。全ての行程に市民ボランティアが活躍した。

いせびと歳時記

秋の伊勢志摩のまつり・イベント情報

10月

2日(水) 遷御の儀(内宮)

一般の参拝者の拝観はできません(本紙4頁参照)。

5日(土) 遷御の儀(外宮)

一般の参拝者の拝観はできません(本紙4頁参照)。

5日(土)~6日(日) 第一回 なでしこたちの祭典

「女神力」満ちるこの地で育まれてきた伝統文化や食文化が一堂に会す。

7日(月)~平成26年8月24日(日) 第62回神宮式年遷宮展「おみやまつり」

山口祭から、クライマックスである遷御の儀までの8年間で、30を数える遷宮諸祭で、実際に使用された祭具をばはじめ関連する資料を展示。

12日(土) 浜島大祭

宇氣比神社の例大祭。地域ごとに趣向を凝らして色とりどりに飾りつけられた町内を、揃いのハッピー姿の子も達が神輿を担ぎ練り歩く。

12日(土)~13日(日) 伊勢まつり

市内の大通りをおまつり広場にして開放通りには様々なテントショップが並び、伊勢音頭、吹奏楽、太鼓の演奏、ミス伊勢志摩など趣向を凝らしたパレードが続く。

12日(土) 初穂曳(川曳)

神嘗祭を奉祝して、初穂船に初穂をのせ五十鈴川を遡り、内宮へ奉納する。

16日(水) 初穂曳(陸曳)

神嘗祭を奉祝して、奉曳車に初穂をのせ市内を練り歩き、外宮へ奉納する。

15日(火) 初穂曳(陸曳)

神嘗祭を奉祝して、奉曳車に初穂をのせ市内を練り歩き、外宮へ奉納する。

17日(木) 旧暦で楽しむ十三夜の月見「音楽の夕べ」

十五夜だけでなく、十三夜の月もまた美しく、今宵だけの音楽と料理が楽しめる。

19日(土)~20日(日) 鳥羽クラフト展
全国から芸術家、工芸家100余名が集う、クラフト作品の展示即売会。

22日(火) 真珠祭

真珠養殖で使われるアコヤ貝の供養と真珠養殖の発展を祈願する行事。

14日(月) 神御衣祭

古式のままに奉納された和紗(絹)と荒紗(麻)を、皇大神宮と別宮の荒祭宮に奉る。

14日(月)~15日(火) 神嘗奉祝祭

神嘗祭を祝って、日本三大民謡、三大盆踊り、三大パレード、三大音頭など、全国の祭りが伊勢に集まる。

15日(火)~25日(金) 神嘗祭

神宮の最も由緒深い祭典で、その年の新穀をお供して神様の常若を祈り、豊穣に感謝する。両正宮に続き25日まで、別宮を始めすべてのお社で行われる。

26日(土)~27日(日) 神恩感謝日本太鼓祭

全国各地の太鼓衆が伊勢に集い、郷土色豊かな共演をみせる。日々の感謝の思いを太鼓に託し、神宮の杜に奉納する。

27日(日) 河崎商人市

伝統的な町家や蔵が残る江戸時代からの町並みで行う市。伊勢志摩の物産をはじめ、手づくりの作品や衣食住の様々な店が河崎本通りに並び、河崎ライブや竹細工などの体験や、河崎スタンラリーなども行われる。

写真展「日本人のころ」

常設平成26年春頃まで入場無料。伊勢市、五十鈴川、おはらけ町通、赤福本店、河崎、川崎、河崎本通りと伊勢河崎商人館及び河崎・川の駅。



真珠祭

遷宮奉祝奉納行事スケジュール

遷宮奉祝奉納行事スケジュール表 (一部 参集殿)

内宮 場所・神苑特設舞台(一部 参集殿)

内宮 場所・神苑特設舞台(一部 参集殿) 日程表

外宮 場所・勾玉池奉納舞台

外宮 場所・勾玉池奉納舞台 日程表

第六十二回伊勢神宮式年遷宮奉祝「鎮守の里」コンサートを開催

伊勢神宮式年遷宮イメーτζソング「鎮守の里」を作詞・作曲した歌手の藤井フミヤさんが、十月の御遷宮を奉祝するコンサートを八月七日夜、内宮参集殿で開いた。

購読のご案内

本紙を購読ご希望の方は、ご住所・お名前・電話番号・人数・部数を明記の上、下記の料金案内をご確認いただき、伊勢文化舎までお送りください。

伊勢からの便り

遷宮祭のクライマックス・遷御の儀が近づいてきました。小舎にとつては二回目の取材です。



伊勢からの便り 遷宮祭のクライマックス・遷御の儀が近づいてきました。

ご遷宮記念 伊勢神宮参拝きっぷ 往復特急券付

きつぷのセット内容 発売期間 平成25年9月1日(日)~平成26年3月28日(金)